

グローバル人材育成プログラムで 得たもの

小林 知 弘
Tomohiro KOBAYASHI
電子情報学科 3年

1. はじめに

2016年8月11日(木)から29日(日)にかけてアメリカ、カリフォルニア州のサンノゼ、サンフランシスコにて企業見学、企業研修を含むグローバル人材育成プログラムに参加した。具体的なプログラムの日程を表1に示す。本稿ではプログラムに参加した目的、研修内容とそこで学んだこと、米国と日本の比較、プログラム全体を通して得たものとそれを踏まえた今後の目標について記す。

表1 プログラムの日程

8月11日(木)	出国, シリコンバレーツアー
8月12日(金)	シリコンバレーツアー
8月13日(土)	講演会
8月15日(月) 8月26日(金)	インターンシップ
8月29日(月)	帰国

2. 参加目的

ここ数年、日本では“グローバル化”が謳われ続け、それと同時に“グローバルな人材”が求められている。しかし、“グローバルな”という表現はかなり曖昧で、抽象的な言葉であると感じる。従って私は“グローバルな人材”とは何か、実際にアメリカで働かされている日本人の方による講演会や現地企業での実習を通して“グローバルな人材”について具体的に学ぶことを目的の1つとした。また、多くの国から人が集まるアメリカではどのように人々が暮らしているのか、日本との暮らしの違いを知るのも今回のプログラムに参加した目的の1つである。

3. 研修内容

今回のプログラムでは表1にて示したように、シリコンバレーツアー、アメリカで働かされている日本人の方による講演会、現地企業での実習を経験した。

3.1 シリコンバレーツアー

シリコンバレーツアーでは Oracle, Facebook, Plug & Play など有名企業の訪問、見学とサンフランシスコの観光を行った。中でも Google のサンフランシスコオフィス見学は特に強い刺激を受けた。1998年に誕生した Google がどのようにしてわずか20年弱のうちに世界中の誰もが知る企業へ成長を遂げたのか、前々から非常に興味があったからである。

まずオフィスに入って最初に“オフィスらしくない”と感じた。内装はカラフルで、ジムの設備やゲームセンター、お昼寝をするためだけの部屋があり、大人の遊び場のような印象を受けた。これは“社員がストレスを感じずに仕事ができるように”という考えに基づいているからであると、社員の方が教えてくださった。これは、私が持っていた職場のイメージとは大きく異なっていて、革新的なアイデアはデスクの前でのみ生まれる訳ではないと感じることができた。また、“ユーザーにフォーカスしよう”という考えが Google の文化としてあるそうで、この考えがこれほどまでに多くの人々から支持される検索エンジンを生み出し、Google をわずか20年弱で世界の大企業にした所以なのではないかと考えられる。2時間ほどの見学であったが、たくさんの刺激を受け、貴重な経験ができた時間であった。

3.2 インターンシップ

今回のインターンシップでは、Device Net USA, Inc. でお世話になった。主な事業内容はホスティングサービス、IT サービス・ソリューション、ソフトウェア・コンピュータとその周辺機器などの販売

である。今回の研修で私が主に行ったことは、サービスエンジニアの作業補助、ネットワークの構築であった。

サービスエンジニアの作業補助では、オンサイトでサーバーチェックを行ったり、ライセンスの更新をしたり、故障したハードディスクの交換を行ったりした。また、リモートでサーバーチェックを行う様子を見学させていただいた。サーバーチェックは問題なく行われたが、問題があった場合の対処の手順を教えていただいた。今回は一番単純な問題の対処方法を教えてもらったが、それでもたくさん考察しなければいけないことがあり、フローチャートに書き表すとかなり複雑であった。これだけの作業を適切に行うには、作業手順を頭に入れておくことが必要不可欠であるが、それに加えて実際に問題を見つけて対処する経験が重要になると感じた。

ネットワークの構築ではまず2台のPCを用いてそれぞれにWindows 7とWindows Server 2008 R2をインストールし、サーバPCの方にはADDS, DNS Server, DHCP Serverの3つの役割を追加した。サーバーマネージャーを用いてこれらを追加したあと、クライアントPCでユーザーを新たに2つ作り、それらをドメインに参加させた。それらをつないで簡単なクライアントサーバシステムを構築した。このあと、構築したLANとWANを繋ぐ工程に入ったのだが、ここからはFirewallの設置など難しい作業が多く、何回も何回も社員の方に質問をしながら行った。英語での説明は聞き取れないこともあったが、何回も聞き直したり、図で示してもらったりしながら作業を理解し、進めていった。また、質問をするだけでなく、わからないことを自分で

サーチし、テストをするように心がけた。この作業のおかげで自分がどこでつまづいているのかを明確にすること、疑問点に対して考察し、整理し、ポイントをリサーチする力が身に着いたと思う。これは私が2週間インターンシップとして研修させていたでいて学んだことのなかでも最も大切なことと考えられる。なぜならば、日本に帰って大学で研究するうえでも、社会に出て働くうえでも、こうした経験は確実に活きたと考えられるからである。最終的にLANとWANを繋ぐという1ステップを進むのに4日間かかってしまった。結果だけを見ると、ただの1ステップかもしれないが、そこに辿り着くまでのプロセスで大きな収穫を得られたと思う。

研修を振り返ってみると、あつという間の2週間であったが、ネットワークについて基礎的なことを学ぶことができたと思う。アナログのエンジニアになる上でもネットワークについての最低限の知識は持っておいた方がいいと教わったので、日本に帰ってから時間も見つけては勉強をしていきたい。

4. おわりに

今回のプログラムを通して自身の英語力の向上はもちろん、将来の目標とそこに至るまでのプロセスを考える上で大きなヒントを得ることができたと感じる。これからはもう一度自分がしたいことは何かを再確認し、なりたい自分になるにはどうすればよいかプランニングしていきたい。

インターンシップ生として受け入れてくださり、たくさんの貴重な経験をさせてくださったDevice Net USA, Inc.の皆様に心より御礼申し上げます。